

〔白磁の美—東洋における造形とその展開—展によせて〕

定窯白磁の歩み —越窯青磁との比較より—

白い胎土で成形し、透明釉をかけて高火度で焼成した白磁は、中国・南北朝時代の北齊（6世紀後半）に焼成が始まりました。中国では後漢時代に越州窯（浙江省北部）において始まる青磁が晋時代（265-316年）には最盛期を迎え、その後も長期に渡り青磁窯の中心となっていました。青磁は釉中の鉄分が還元焰焼成により青く発色したもので、釉中の不純物や色を発色する鉄の含有量を極力取り除き出来たものが白磁です。北方の河北省臨城県と内丘県を中心とした邢窯が、胎土のきめ細かく雪のように白い磁器を焼成するに至り、唐時代には最盛期を向かえて「南青北白」（南方の越窯青磁、北方の邢窯白磁）と対比称されるまでになります。その邢窯の白磁の使用状況は、「天下に貴賤無く之が通用した」（唐・李肇『国史補』）と記されています。邢窯は唐時代晩期には衰退しますが、同じく河北省の曲陽県に位置する定窯が受け継ぎ、北宋時代には北方白磁を代表する窯になります。定窯の基礎には邢窯があるといえます。

定窯は器壁の薄く精巧な造形で、北宋後期以降金代にかけて印花（型押し技法）により精緻な文様をあら

わした碗や盤を、伏せ焼き焼成により大量に生産していきます。

しかし、晩唐から五代を経て北宋前期にかけての時期には、当時の時代における風潮をより反映した作風を制作していたことを、作品に見ていくことができます。そしてこれは定窯の技術の向上と造形上の変遷の過程として捉えることができます。図1は双蝶文輪花形洗（高さ2.8cm、口径10.6cm河北省定興博物館蔵）、口縁部に五ヶ所窪みを付けた輪花形で、浅い鉢型、底部には低い高台が付き、高台内部に「官」の字を線刻します。本品の見込みには線刻により二匹の蝶が向かい合わせに描かれています。描線は単線で、やや直線的な線が浅く引かれます。蝶はつややかな透明釉の下にその姿を浮かび上がらせています。定窯において北宋初期から前期には深く彫り込みを入れて浮き彫りのように蓮華文などをあらわす装飾技法が見られ、後期以降には浅い片切り彫りが見られ、またしばしばこれと併用される細線は櫛状の工具を用いたような数本の平行線を連ねており、どちらも本図の線とは異なります。

図2は北宋時代越窯青磁の盤（内

蒙古哲里木盟遼陳国公主墓出土 高さ5.1cm、口径16.4cm 内蒙古自治区文物考古研究所蔵）で、六弁の輪花形口縁を持ち、低い高台を持つ図1とはほぼ同じ器形です。見込みには隠刻線により、二匹の蝶が向かい合うように配されて刻まれます。その構図や線刻は図1と酷似しており、明らかな影響関係が窺えます。描線は図1の作例よりも曲線は滑らかでより手慣れた感があり、蝶の軽やかな動きが流麗な線で描き出されています。高台内部を含めた器表面全体に青磁釉が施されており、刻線の凹部に僅かに多く溜まった釉薬により線の色は濃い青緑色となり、図像がはっきりと認められます。

さらに、図3は同じく越窯青磁の水注（北京・石景山遼韓佚墓出土）で、胴部や蓋、注口部など器表全面に図2と同様の細線で人物文等が刻まれています。本水注の胴部はやわらかな曲線で六花形を呈し、蓮蕾形のつまみが蓋上に付きます。文様は浅く、伸びやかに引かれて、茶碗を持つ人物が向かい合う図像の他、靈芝雲や雲文、唐草文等が見られます。本品は遼時代の墳墓より出土しており、墓主の韓佚は遼・統和十三年（995）に亡くなっています。このように、北方の墓でも越窯青磁の優品が、そして南方の墓からは定窯白磁の優品が出土しているように、流通が活発に行われていました。図2、3の作品に施されたしなやかな刻

線は五代～北宋前期の越窯で用いられる装飾技法の一つで、五代の金工作品にも認められます。ここに、定窯白磁がその初期の段階において越窯青磁の影響を大きく受け、その装飾技法や文様を取り入れていた様子が見て取れます。

最後に、図4は白磁印花牡丹文鉢（高さ6.4cm、径20.5cm 大和文華館蔵）は範型に直接文様を彫り込み、そこに素地を押し付けて施文と成型を同時に行う技法によるものです。器壁は緩やかに湾曲しながら立ち上がり、碗の見込みには雷文や牡丹文、靈獸文などがあらわされています。ほぼ同時期に行われていた浅彫り文様と比べて、印花では複雑な文様が施されるようになり、稜の立った凹凸により文様は明瞭になります。この印花の作品は写実性を残した牡丹文が伸びやかに花卉や葉を広げており、北宋時代末頃の作と考えられます。口縁部には伏せ焼きにより無釉となった部分に金属の覆輪がつけられ、当初はこの覆輪を金や銀で施すことで典雅な印象と高貴さを象徴していました。しかし北宋末には定窯の器にこの無釉部分「芒」があるために宮廷で嫌がられ、汝窯の器を用いるようになったと『老学庵筆記』（宋・陸游著）に記されています。

（図1は『中国陶瓷 定窯』上海人民美術出版社1983年9月、図2は汪慶正主編『越窯、秘色瓷』上海古籍出版社1996年11月、図3は『世界美術大全集 東洋編5』小学館1998年12月より転載させていただきました。瀧 朝子）

図1



図2



図3



図4



季刊 美のたより No.163

平成20年7月4日

発行 大和文華館